

## 懷舊座談會記事

昭和 22 年 11 月 11 日 於日本工業俱樂部

### 出席者

赤崎 繁 井口 常雄 出淵 巽 小野木敏雄  
加茂 正雄 加藤 弘 菅 四郎 柳原 鉞止  
斯波孝四郎 鈴木恒太郎 玉井 喬介 常松 四郎  
朝永研一郎 南波松太郎 松本 良一 湊 一磨  
八代 準 山本 開藏 山本 幸男 山縣 昌夫  
吉識 雅夫 渡邊 賢介

井口 これから座談會を始めますが、私會長と致しまして一言御挨拶を申し上げます。本日御多用のところ御出でいただきまして有難うございました。協會の五十周年記念式も先程滞りなく終りました事は御同慶に存じます。人生 50 年と申しますと、随分長い様でございますが、會としましては 50 年と云うのはそれ程長いわけじゃございません。外國ではまだまはだ古い學會が澤山ございますが、我國としまして最近の 50 年の間というものは總てが非常に發達變動がありまして、然し發達と申しても今度の敗戦によりまして我々は悲惨な逆轉をいたした次第でございますが、とに角大きな變化がありました。でありますので此の間にあつて我々造船界の者も矢張り非常な時機にぶつかつて居るのでございます。之等を記録として残して置きます事は後世のために多大の参考資料と存ずるのでございまして、之により歴史というものが非常に貴く、重要だと云うことも承知する次第でございます。そんな意味で協會の歴史というものもこの前の四十年記念の時には協會史として印刷されました。しかし、そう云う様な記録だけでありますと、その時の會の活動の氣分と申しますか、氣持と申しますか、そういうものがわかりませんで、一體どんな精神でこういう催しものかなされたものか、こんな活動があつたかと云う事はあらわれて來ないのでございます。これが何かの形で残つて居りますと、これから後の會員としまして、色々な仕事を計畫したりなんかするについての非常な参考になるだろうと存じます。こんな様な次第でありますので、成可く本協會に古くから色々な事業について御關係のありました謂所先導格の會員の方々にお集りを願ひまして、そんな意味の歴史に附随した資料を御提供願ひたいと存じまして、此の懷舊座談會を催した次第でございます。

この會を一般會員のために公開したら何うかと云うお話もございました。然しお話をうちとけて自由にして頂く爲にも、又纏りをつけるという爲にも限られた方々で、小人数でやつた方がよからう、又前々に申述べました様な意味の點は、こゝで一般會員の方々に來ていたゞかなくても會報にこの模様をのせまして、會員に知らせる事によつて目的を達成される、この様に存じた次第でございます。あまり長く喋つてをりますと座談會の貴重な時間を割きますので、一應今申上げました様な趣旨を私は考えます。夫れをお話申上げました次第でございます。夫で之から座談會を進めていただきます上で、座長に司會をお願いしたいのでございますが、非常に古くから現在までずっと東京で、いつも本會の色々な事業に御關係になりましてよく色々な事について御承知で居られます湊さんに司會を御願ひ致し度いと存じます。どうか一つ宜敷くお願い致します。

渡 それじゃ冒頭に一寸一言御あいさつを申し上げます。本日は造船協會の五十周年記念の式典を挙げられました、私ども會員一同として誠に御同慶に存ずる次第でございます。この機會に造船協會に於かれましては、只今井口會長からお話がありました様な趣旨で 50 年の輝やかなしい歴史を回顧し、思い出を語る座談會を開催せられました事は誠に機宜のお企てと現役員各位のお取計りに對して、會員として謝意を表するとともに、御同慶に存ずる次第でございます。然る所私に司會者、座長をつとめる様にと云うお指圖を受けたのでございますが、會長御自身お當りになるのが最も適當かと考え又その他にも幾多の適任者がおありになる様に存ぜられますが、私として全くその任でなく當惑の氣持ちでございますが固辭することも如何かと考えてお引受け致した次第でございます。幸に造船協會の過去 50 年のうち約 40 年の間、大學にはいつて學生時代から今日まで東京の土地を離れたことがありませんので、その間に割合に早い時期から造船協會の活動の渦中に誘ひ込まれ、或は活動狀況を継続的に見聞きする機會に恵まれて居りましたので、造船協會の輝やかなしい活動の成果、見事な玉を綴り合せる細い紐の様な役目をつとめるのに多少便宜かと考えまして、その紐を頼りに皆様の豊富な思い出話を綴り出してたい

き度いと考えておる次第でございます。何うか皆様の御支援、御協力に依りまして此の重任を果させてらたゞき度いと念願を致して居る次第でございます。夫ではこれから逐次御發言をお願い申し上げたいのでございますが、皆様が思い出の絲をたぐられる程度の御便宜にもと存じまして一應こゝに造船協會の年表と申しますか、年順に委員會の名稱、時期、また地方大會の開かれた時期等を表に致して御覽に供しますから之等をその頼りにお使いいただければ仕合せと存じます。なお今日は懷舊座談會と言う事になつて居りますが過去を語ることは、故きを温ねて新しきを知るという趣旨でもあると考へますので、何うか懷舊談と共に造船協會の將來に對する御意見、御希望、抱負等積極的に述べ下されば、一層有効ではなからうかと考へて居る次第でございます。なお此の座談會のお企てを本年4月頃伺いました際に會員中の長老としてどんな方々が居られるか私の知つてをる範圍で辿つて見ました所、澤 鑑之丞と云う方が居られましたが、この方は明治30年4月造船協會が創立せられました當時の評議員の一人であられた様に存じます。只一人の御存命者として頼りに考へてをりましたが、本年5月に88歳の御高齢で亡なられました。斯様な事になることが豫想されれば造船協會からあらかじめ誰かお訪ねしてお話を伺つて誰にも解らぬ様な點を伺うことが出来たろうと考へますが、今更なんとも致し方がございません。長老といたしましては私の存じておる範圍では前會長であられた山本開藏さん、藤島範平さん等が最も古い方々だと存じておりますが、山本前會長は非常なお元氣で本日も御出で下さいました。一同仕合せに存じます。色々お話を伺える事を樂しみて致して居ります。藤島さんも色々造船協會の委員會の委員や委員長になり、又會長等にもなつて面白いお話を多々おありの事と樂しみに致して居りました所、又不幸にして本年9月に77歳のお年で急に亡なられました。返すがへすも残念に存じておる次第でございます。

斯様に回顧してみますと、長老の方々が非常に少いので我々も長老の方々に對して最大の敬意を拂うと共に、この座談會に御臨席下さいました長老の方々に何うぞお力添えをお願い致し度いと存じております。造船協會が発足致しましてから最初の10年間の動靜につきましては、こゝにお集りの大多數の方々は御存じない事が多からうと察しますが、その頃の事を一つお齡の順と申上げては失禮かも知れませんが長老の山本さんからお伺いしたいと存じま

す。

山本(開) 只今御指名ですが、今日は聴取者として来たわけですか。と云うのは私喋る材料はあまり持つておりません。持つて居ないじゃない、もつて居たのが老耗して忘れて仕舞つたのが主でしょう。最近のことは一向知らず、古い事は忘れてしまつた。話すことは何もない。今日は新しい問題を聴うと思つて来たのです。只先程小幡さんのお話が出ましたが、小幡さんはこの會の創立當時の事を多少御存じありはしないかと思つてお訪ねしたのですが一向覚えておらぬ。おらぬのじゃない。御關係がなかつたのかも知れぬ。と云うのは會が出来るときには先生はたぶんドイツに行つておつたらしい。

斯波 小幡文三郎氏でしょう。その時はおらなかつた。

湊 夫から白井頼吉氏は御存命ですね。

山本(開) そうです。

斯波 その頃小幡さんも白井さんも東京におられなかつたんです。だから協會の成立に御關係なかつたと思ふ。

湊 加茂さんは外國に行らして日本を留守にされた時期が相當長かつた様に承知致しますが……

加茂 はあ。

湊 その外は東京に御いでだつたと思ひますが其の前後の状況を御承知じやないかと思ひます。

加茂 さあ、造船協會の方は……

山本(開) なんと云つても寺野さんが一番關係しておられたに相違ないね。海軍の方で松尾さんは何して居つたでしょう。近藤さんは居なかつたですね。

加茂 松尾さんは亡くなりましたか。

山本(開) 一昨年亡くなりました。

湊 斯波さん、何か。

斯波 座長さんから創立當初よりの懷舊談を述べる様にとの御申付であります。實は私も創立當初から今日まで引續き關係しておる一人であります。明治30年と云うと私は大學の造船科の一年に在學中であつたと存じます。それで大學を出ましてから三菱に入職して造船にずつと關係して居りました。そして長崎に居つたのが約27年間、大正14年東京に轉出して今日まで造船に關係して居る次第であります。戰爭中は御承知の通り造船統制會に關係して終戦の最後までやつて居つたのであります。私は實はこの五十年記念式典に出まして感懐無量と申しませうか。申し度い事は山々あるのです。實は前の四十年記念式の際に私が當協會の會長として擧式を致したのですが、その際には先輩の方々が澤山居られたん

です。山本さんや加茂さんも無論居られました。その方々が40年間の回顧談を種々有益なお話を多分に述べられたのでありまして、記録も充分にあるだろうと思います。さて四十年記念、それは昭和12年でしたが夫から今日までの10年のことを考えてみると、極めて短いようではありますが之は日本の造船の進歩というか、變遷と云うものから考えてみると、誠に異常な、大變なものであり特に戦争中は眞に驚くべき發展をなしたと私は考えております。50年から40年までの40年間は、もちろん靈期的の進歩はして居つたけれども、之はいはば順調なる進歩であり、謂所10が20になり、20が30になると云う様に發展をしたのが最近の10年間と云うものは普通以上の異常なる發展と云つて差支えないと思う。實に驚くべき變遷な發展をやつて、最後にばつたり倒れたと云う状態でした。即ち日本の國が倒れると同時に其の造船も或る意味に於てばつたり倒れたと考えていふと思ひます。今や日本は茲に新日本のスタートをするのですが夫と共に造船も亦新しきスタートをしなければならぬと考えているわけです。無論日本の造船は平和克服後は直に戦前の盛んな時代に回復したいと云う様な考え方もある様ですが、戦前同様の造船様式が再見復歸すべきものではないと思ひます。戦はもう過去の事として、今度は生れ替つて戦争中の尊き經驗を織り込み新しき様式を加味した新時代に應わしい造船が生れねばならぬと存じます。そういう様な事で最近の進歩發展というものは既に皆さんが充分御熟知の事と存じますが、然し昔様の方はその渦中に居られるというと案外に發展の徑路がよく分らないと云う場合もあると存じます。例えば今どきの子供は物價の變動をどう考えているか。我々は非常な物價の變動がある様に思ふけれども今どきの子供は、これが當り前だ、アメが一つ1圓2圓すると云つて我々はびつくりするけれど、今の子供はそれを當り前だと思つて居らしいんです。そういうわけで、最近の若い方は最近10年の此の進歩を御覽になつても別に不思議なことはない。當り前な事とお考えになるかも知れんけれども、昔々古い老人から見ると昔からの造船の事をずつと考へて最近10年のことを考へると想像も及ばぬ様な事が續々さかんに行われて居つたんですね。夫れが好いか悪いかは別として考へも及ばない事實が盛んに行われておつたんですね。それでそういう驚くべき事實を今後の日本の造船の参考に資すること極めて大事なことである事は當然であります。そこで終戦と同時に造船がばつたり倒れると共

に大切な歴史や事實の記録が煙散霧消する様な事があつては重大事件であり非常に残念だと思ふんです。之はこの際是非共詳しく且つ充分なる記録を残して置きたいと思ふのであります。

本日の御講演の中に、最近10年間の造船學術並びに技術の進歩というお話があつたんですが、之は時間の御都合もあつたと存じますが言わばほんの一部分の御説明にしか過ぎなかつたと考へます。殊に造船技術として大瀬さんのお話もあつた様でございますが、工事上の事についてはあまりお觸れになつて居なかつた様に思ひます。之も時間の關係もあつたでしょうが、色々技術上の點についての進歩とか發展とか、變化という様なものは誠に驚くべきものがあつたと思ひます。例えば造船技術の進歩について先程お話があつたのですが、從來船と云うものはマス・プロダクションで造るという様な事は殆んど考へなかつた。船を自動車と同じ様にマス・プロダクションでつくると云う様な事は一應誰しも考へられるでしょう。無論外國でもそういう話がよく起きていたのでも、我々は常に一笑に附して、自動車はマス・プロダクション出来るかも知れぬが船は全然違ふんだ。一艘ずつ造る。そこが造船のいゝ所だと云つて殆んど問題にして居なかつたんですね。殊にイギリス流の造船の眞似をしている日本としては種々の事情によりマス・プロダクションなんか出来る筈はなかつたのです。所が必要に逼られて見ると事實實行出来たんですね。又船の構造にしましても例えば吾々の從來の常識としては、外板のバットはシフトすべきだと云うところを動かすべからざる條件の様考へておつた。所が材料の關係上そういう事が出来ぬような時代になればバットを上下一線に集中しても何等支障を來たさなかつた。それから船の各部の構造や鋼材の寸法にしても從來はロイドルールその他外國のルールのコピーか又は其の倣直しに過ぎなかつた。

然し材料入手難の關係から夫等のルールより著しく變更して建造されたが之等も大した差支はなかつた。そういう事で我々の頭がずつかり變つて仕舞つたわけです。そのみならず先程お話のあつた様なシングルランチングウェイの成功、或は數ヶ所に建設せられて簡單造船所による徹底的マス・プロダクションの實行の如きは眞に驚くべき事實が現出したんですね。夫から標準船型の問題ですが、戦時中海軍が流分突飛な標準型を制定せられて種々問題を惹起した様にきいて居ます。之等に就て今日に於ては何等遠慮なく良い所は良い、悪い所は悪いとして充

分レコードを残して置いて戴き度いと存じます。殊にもう秘密と云うものはなくなつた筈です。例えばあの頃出来ました6萬噸とか云う様な驚くべき軍艦についての各種のデータも終戦の際大部分散逸したように聞いて居ります。之等の世界的記録を後世に遺す様にして戴き度いと存じます。

そこで當協會はひとつ思いきつて此際各方面に手分をされて、そういう記録の散らばらぬ様にそれを蒐集されると云う事が協會に與えられた大使命じゃないかと思う。現下これは一體誰がやるのか。聞く所によると海事振興會の方々がおやりなるそうでありますが、海事振興會自身が直接おやりになるよりは寧ろ振興會がバックされて造船協會が中心となりおやりになるのが本筋かと思ひます。以前の造船統制會が存立の時代ならば、それがやるべきであつたかも知れませんが、それもなくなつて仕舞つた今日當協會以外には適任者がいないかと存じます。當協會は各方面の權威者を網羅しておられるのですから、その方々が手分しておやりになれば今日なれば充分出来るのでありましよう。之もあと2~3年すると怪しくなるんじゃないかと思う。尙以上の外古い事でお話申上げたいこともあります。古いことは幸に記録も相當残つている様ですが然し最近のことは記録が殆んどなくならんとしつゝあるので、之は非常に惜しいと思ひましてその事に就いて特に何とかお骨折りを願ひ度く存じて一言致した次第であります。

淺 斯波さんから秘密の一端を摘發して、色々技術の保存、資料の蒐集について強力な御指示を戴きまして有難うございました。山本幸男さんは創立當時からの前後のことを御存じの事と思ひますので、何か思ひ出話を伺わせて戴き度いと思ひます。

山本(幸) 私もうすぼんやりと、ピンぼけを喰つた様な頭なんです。私も斯波さんと同じような時代に大學におつて……たしか私が30年に大學に入つて斯波さんは29年だつたか……

斯波 そうです。

山本(幸) ところが私が入つた途端に造船協會が創立の發表をしたんじゃないですか。

斯波 そんなものです。30年ですから、そうですよ。

山本(幸) それで私が卒業したのが33年ですぐ准員といつたか何と云つたか、それに引張り出された。あの頃はしよつちゆり懇話會があつて、近藤先生、三好先生にあつていつも必ず牛肉を喰うんです。

山本(開) 造船協會の委員か何か……

山本(幸) 銀座裏にあつた。

加茂 事務所が一所にあつた。

山本(幸) 三好先生がさかんに酒を飲んで、氣焔をあげて牛肉を食べてね。あの先生亡なられたのは52ですか。

斯波 あの頃老人だと思つて居つたけれども若かつたんだね。

山本(幸) 酒ずきでね、すぐ酔つ拂つちやう。末廣が何時も一所だつた。

斯波 若かつたんだね。

山本(幸) 先生もういゝ加減だと思つたから、先生さうお飲みになつてはお體に悪いでしょうから、と云つてもなかなか歸ろうと言わない。仕方がないから末廣と私が、私が足の方だつたかどつちだか、とに角二人で抱えてね、あの工學會の二階なんで、夫でヨツサヨツサと擔ぎおろした。下には三好さんのお抱えの人力車の車夫が待つていて人力車に擔ぎ込んだ。小さい人だつたから擔ぐのにわけはない。そんな事を憶えている。然し私は初代の會長の佐雙さんの事は憶えていない。あの方は直ぐお辭めになつたか……

山本(幸) 會長は赤松さんだつたか。

淺 われわれ物心ついた頃の會長は赤松さんだつた様に思ひます。

山本(幸) すると、會長は赤松さん、それから佐雙さんと寺野さん……

淺 今のお話は一寸飛びます。工學會の事務所と云うのが私達覺えた最初は、數寄屋橋から南の方へ行つた湊端に近い所で地學協會の事務所だつた、あそこに工學會も造船協會も同居してをつた様に思ひます。

山本(幸) 工學會が家を借りておつて、そこに造船協會が同居しに行つた。

淺 それを考えると造船協會の事務所も震災で焼かれ戦災を被り、随分轉々としたわけですね。

山本(幸) 工學會の建物というのが鹿鳴館時代の建物だつたね。

淺 牛肉を食べる會で思ひ出しましたが、メニューレス會というのがありました。四谷の三河屋で牛鍋をつつき或は銀座か日本橋あたりの竹葉でやつた。メニューがない會です。通知はするが出席の返事無用、行つて見ると20人居たり30人いたり、なんでも四谷の三河屋でやつた時加茂さんが外國からお歸りになつて、ちやきちやきの所で飛び込んで來られたのを記憶しておりますが……(笑聲)

加茂 メニューレスとは近藤さんが附けられた名前だ。白井頼吉さんのお話が出ましたので思ひ出しましたが、丁度私が長崎で實習をしておつた時代、之

は機械學會でも言つたんですが、兎に角日清戦争の直後これまで千噸以上の船は日本で出来たやつがないと云う時代からいきなり6千噸の常陸丸をこしらえたのです。夫は大分苦勞があつたようです。先ず鑄物から始めると云うので僕は實習で一人で鑄物の型をやつておつたら、ちよつと来い、と言われて運出された。飽の浦の球場のそばでね、どうするのかと言つたらウィスキーを飲むんだ。ウィスキーと云うものは斯ういう時に飲むんだ。一つ仕事を仕上げで安心した。そこで飲むと效き目がある(笑聲)。

兎に角1千噸のボヤンシーでね。その後呉に行つて仕舞つたから関係しなかつたが1ヶ月位で出来上つたようです。とかく當時は幼稚なものだつた。その當時インフレキシブルと云うクルーザーが来ておつた。そしてワットソンと云のが居て僕はよく遊びに行つた。行つた譯はどうかと云うと、ハンプレーでプロフェッサー、イノクチと一緒にやつた。それで親しみがあるものだからちよいちよい行つた。プロフェッサーイノクチの話をおきくと書物を読むようだ。コンバルジヨンという様な書物を読んでいる。それで佐世保の工廠、その頃は工廠といわない、造船所だつた。佐世保の造船所に行つてみた。すると水雷艦が来ておつた。それに乗つた。その時白井頼吉先生が少技士ですよ。卒業してから7年経つているんだ。

山本(開) とにかく技士候補生の経験のあるのは私からはじめてなんだ。

新波 柴岡君は最初は少尉にならなかつたですね。

加茂 少技士? と云うものはなかつたが値うちがあつたね。

井口 いきなり中技士になつたのは大分あとですね。

新波 よほど後です。僕等の時代です。野中君とか藤田君それ等の方はすぐ中技士になつた。

加茂 一本筋では面白い話がある。なんかクランクシャフトが折れたんですね。山田銈太郎という人、山田佐久さんの兄さんだけれども、之が機械課長だつた。課長見ろ、クランクシャフトが折れた。早く直さなければいかぬ。何を言うか、鑄物場は大丈夫か。そう云うのがおるのだからね。見給え、俺の課長は大佐だ、俺は一本筋だ、あの筋と俺の一本とちつとも違わぬ。値うちはね、ところ天みたい區下から押上げられると筋がふえるだけだ。あたまは少しも違わぬ、俺の方が上かも知れんぞ……(笑聲) そう云う事を考えると今のお話の様に最近の10年間の發達と云うものは、これ又偉いものだつたと思ふ。

新波 先程加茂君のお話の様に、私長崎に行つたのは

明治31年に實習で行つたのが初まりです。その時の實習について私の思い出話を申上げれば、其の頃日本の造船が急激に發展したのでその關係より逓信省(今の運輸省)で船舶試験の名のもとに船の検査をさかんならしめたいと言う事になつて大學の卒業生をも大いに海事官に採用する事になつたものです。實は私も勧誘せられた一人でした。然し私はあまり海事官を希望せず直接造船所に入職したい考えてでしたが、その頃造船は不景氣でどこでも雇つてくれそうもない。仕様がなから三好先生の勧めにより海事官になれば直ぐに高等官六等になれると云うので大分その氣になつて實習中海事官の見習をすることになつたのでした。夫で早速長崎の船舶試験所の雇と云う事で海事官の手傳いをする事になりました。その時検査の船は常陸丸、立神丸でした。その次は其の頃恰も外國から回航された日本丸、香港丸、アメリカ丸、その時生れて初めて立派な船を見た。見ると同時に検査をやれというわけです。今その頃の事を考えるとまるで夢の様な氣がします。とに角日本の造船は戦争のたび毎に畫期的の進歩をしていた事は事實です。其の後私が三菱に入職して後畫期的な仕事と云えば軍艦の霧島、日向の建造でした。其の前に手初めとして巡洋艦矢矧を建造しました。その次に一足飛びに25,000噸の霧島を建造したのです。えらいハイジャンプでした。其の頃同時に川崎造船所で出来た榛名も同様で、何れも英國製の金剛を見倣て建造したもので、眞に驚くべき進歩ですね。

山本(開) 比叡もある。

新波 いよいよ軍艦會議の直前になつて、土佐とか高尾とか云う驚くべき戦闘艦を造る事になりました。その頃突如として軍艦という問題が起つて一先茲に日本の建艦技術に大打撃を與えたものでした。其の最後の軍艦が土佐でした。

山本(開) 33,300噸だよ。

新波 その土佐と云う驚くべき軍艦を進水して後間もなく續裝もせぬうちに、いきなり土佐沖に引つぱつていつてドーンと沈没させて仕舞つた。實に驚いた事をやつたものですよ。とに角あの頃の土佐と云う様な大きな軍艦を一足飛びに日本にて造つたと云う事は驚くべき進歩でありました。

濱 ビッカースに對する大きな軍艦の外國注文は

新波 金剛が最後ですね。

山本(開) そうです。とに角比叡だろうと霧島、榛名等、皆金剛を見倣つたんです。其の當時の最近のやつをお手本としたのです。所が最近のやつは大和で

あろうと武蔵であろうとお手本がないんだから偉いものさ。

新波 驚くべきものですよ。

山本(開) この前40年のときにお話が出ただけけれども造船は大分フランスに習うところがあつた。

新波 櫻井省三さんの如き。

山本(開) 新波さんのお話の佐渡のアシスタントは僕もやらされた。船舶試験所シケン官。

新波 そのシケン官は試験官でしたね。

井口 そうです。テスト……ですね。

新波 そうそう。

山本(開) あの試験官というのは三好さんがやつた。だから大學の卒業生から引張るんですよ。

新波 ちよほど其の頃遞信省で航海獎勵法とか造船獎勵法なぞの實施の爲に、人手が足らなかつた時代です。それで大學を出た人に初めて職場が與えられた譯ですね。

新波 そうです。

山本(開) もう一つは、金剛の出来る時、正木義太と云うのが來た。

新波 壽郎さんの兄貴ですね。

山本(開) 先生が艦裝委員長というのでね。夫で面白い話を聞いた。あれまでは、みんな12時砲ばかり、富士、八洲、鹿島、香取、それをイギリス、イタリーでも13時砲は使わぬというのを日本が斷呼としてやつた。實際使つてみると非常に立派だつたものだから、イギリスのドレットノート、マレーまでやつた。これも日露戦争のおかげでもつて來たに違いない。

その當時、日本は非常に立派な砲術家がおるに違いないと云う評判だつた。大きな砲を使うからね。

金剛は14時、ところが今度の武蔵は18時ですね。

僕は素人だけれ共とに角造船の進歩と云うものは偉いもんですよ。子供の時の發達はすごい。生れたての子供は一年に一寸も二寸も伸びる。丁度日本の造船協會が出来た時が日本の造船業のスタートと云つてよろしい。その後10年間というものは非常に發達が早い。それからずつとやまく發達して來て、今度の昭和12年から後の10年間に、ストレス、ストレーンできて、エラスチック、リミットを越した。

新波 とに角普通の發達じゃない。

山本(開) それから後べしやんこになつた。

新波 造船協會は秋の總會は東京でやられるのが例でしたが、春は二年目とか或はときどき阪神、九州までも出かけて盛大な會合がしばしば行われていますが、そういう方面で思い出はございませんでしょう

か。玉井さん、長崎に大分ながく居られたですが、九州大會あたりの事ですか……

玉井 私は不幸にしてここに書いてある會合には丁度旅行したか何かで出ておりません。九州地方ではたしか二回ですね。福岡市でやつたのと、夫からこの長崎でやつたのと、二回とも居なかつた。只、ここに書いてある九州造船協會というのがあるのですが、この會長を一時やつた事がある。長崎所長時代にこの會長を2、3年やつた事があるんですよ。此の九州造船協會と云うのは御承知の通り、阪神クラブと並んで、造船協會の支部みたいなものだつたですね。之が毎年一回ずつ九州地方の見學、講演會を開いたんです。どうも地方本會に就きましては今申上げる様に記憶がありません。只先程座長からお話のありました今後の造船協會の行き方とかいろんな點で一寸私の考えている事を申上げ度いと思ひます。

今日も過去10年間の技術の進歩、學術の進歩等について井口會長の仰せかあつたんですが、とに角過去10年の造船の技術の進歩は實に恐ろしいものがあるのであります。之は主として海軍と云うものがありまして、それが歴大な研究機關をもち、又各工廠あたりで色々なプロジェクトをやつて、非常な技術の進歩をもたらしたのだらうと思ひます。と同時に民間に於きましては謂所財閥が巨大な資本をもつてこれが損をかまわずに相當の研究機關をもつてやつて居つた。だから海軍あり、或は民間の財閥ありで造船の非常に顯著な進歩をなし得たのだらうと思ひます。もちろん外に大學或は遞信省一今の運輸省ですが、この方面の方々が努力をされた。之は大きなものがあるんですが、所で今度海軍はなくなつたと云う事になると今後どうして技術の進歩をはかると云う事になると、非常に厄介な問題ぢやないかと思ひます。ところで私の觀測する所によりますと、今まで造船協會と云うものは造船の學術並びに技術に對しまして相當の貢獻はして居つたんですが、然し今まではどつちかと言つて海軍あたりがさほど造船協會を重視して居なかつたのぢやないかと思ひます。海軍が今まで技術に貢獻された事は結構ですが、しかし其の反面において先程新波さんのおつしやつた様に、あまりに秘密主義であつた。技術にしてもすつかり腹を割つて技術を公開出来なかつた。之は技術者の罪ではなく、海軍の方針だつたんでしようが、そう云う事もありますし、又海軍の技術も忌憚なく言つと片輪であつたのぢやないか。足が地についた研究でなかつたのぢやないか。今日も科學文化新聞でしたか、それを見るときは日本の潜水

艦の欠陥が書いてありましたが、あまりに無敵海軍と云う自己陶醉に陥り研究を怠つたと云う様な面もあつたんじゃないかと思う。ですから足が地についた研究よりも、只もう先の方ばかり見て研究したと云う點で、すべての點をパラレルに研究してそうして完全な船を造るという點に缺けておつたんじゃないか。それと秘密主義がひどかつた爲に、本當に研究した結果をフランクに出すと云うことを怠つたんじゃないかと思ひます。そういう點もあり又民間にしてもお互いに商賣があるものだから、自分の研究した事を、全く洗いざらい出すと云う事をやらなかつた。之も確かに非常な缺陷があつた。之は過去の技術の進歩につきまして批判したんですが、さて今後どういふ風に技術を進めていくかと云う事になりますと、先程申しました様に海軍はなくなつた。それから民間でも財閥はなくなつた。従つて民間で研究機關を設けると云う様な事は中々出来ない譯であります。殊に今後數年間おそらく造船業というものは非常な苦況に入るんじゃないか。大分つぶれる會社もあるかも知れません。或は存續し得る會社でもとうてい研究なんか金の出ようがないと思ひます。そういう關係からいきますと、どうも造船協會が今後は從來よりももつと大きな造船技術について役割を演じなければならぬだろうと思ひます。ですから今後はもう海軍なし財閥なし、吾が國に於きましては造船技術に就きましては何うしても造船協會と云うものにうんとふんばつてもらつてこゝで技術の進歩をはかると言ひより外に、當分は手がないんじゃないかと思ひます。さて造船協會が大いにやるとしても先だつものは資金なんですから金を何うして捻出するかと云う問題にぶつかるんです。之は殊に現在の様に金の逼迫している時、或は今後數年間は其の状態が続くでしょうが、そういう状態に何うして研究資金を出すかと云う様な事は残された大きな問題だろうと思ひます。いずれにしても今後は從來に増して造船協會と言ひうものが造船學術並に技術の進歩に對しても、第一線に立つてやらなければならぬだろうと考へる次第です。

井口 實際その通りですが實に造船協會の任務は重いですな。

山本(開) 1897年イギリスのタインビクトリアのダイヤモンドの時、ハート、ハントレーと云う2隻の駆逐艦が入つた。僕は横田と2人で見に行つたが、あれがイギリスの駆逐艦の來た初めてだつた。あの時に34節半出したのだから驚いたに違ひないと思ひうのだ。

渡 八代さんお願いします。八代さんは前半東京に居られて、後半大阪で活躍されたわけですが、造船協會に澤山ペーパーを出され色々委員會に關係しておられましたか……

八代 別に申上げる事もないのですが、私は明治41年に東大造船科を出たのでありますから此處におられる先輩の方々よりは十數年経つて學校を出たことに對するのであります。ちよつと日露戦争のすぐあとです。造船協會が出來て十何年経つて初めて會員にして頂いたのです。創立者であられる近藤基樹さんとか云う方に永く部下として親炙しておつたものですから色々造船協會創立當時の古いお話は斷片的に伺つてゐるんですが、どうも夫がすつかり系統的にまとまつてよく記憶に残つておらないのであります。私は學校を出ましてから暫くの間、その時分若いものですから、色々造船協會の方の下働きをさせられたものです。多分雜業が出來た時の最初の編輯委員かその下働き位いの所をやりまして、近藤さんとかここに居られる山本開藏さんあたりの御下命を受けてやつていました。雜業の初號あたりを御覽になると、随分今と違つた幼稚なものでありますけれども、あれでも一生懸命で我々の様な若い連中が數人で下働きをやり先輩會員に色々教えて頂いてあつたものが出來たのであります。近藤さんからは斷片的ではありますが色々面白いお話を伺つてゐるのであります。夫からもう一つパービス先生が妙な縁で度々交渉がありました。この部屋に御出になる方々は大學時代に大分御縁故がある方々と思ひますが私はパービス先生に妙な縁で旅行先で度々偶然ぶつかつたりイギリスにリタイヤされてからもお目に懸つたり度々お手紙なんか頂戴したのであります。

次に海軍の話になりますと、ここに長老の山本開藏さんが御出になりますからお話を伺うのに最も適當なお方と思ひます。只ここに山本さんを前に置いて申上げ度いと思ひますのは、長門の建造の時であります。あの時はたしか山本さんが計畫主任ですか、平賀さんがその下働きをしておいになつて、どうして船體の形をきめるとか、寸法をきめるとかは當軍海軍の艦型、試験所の方で近藤さんが所長、私が下働きをしましてでつち上げた譯であります。その長門も戦争の結果最後に残りまして先般クエゼリン環礁で原子爆彈の洗禮を受けたと言ひうことを新聞で見たのであります。あそこにアメリカの軍艦、日本からの分捕軍艦その他色々な軍艦をあつめ、上からバカーンとやつた擧句が兎に角長門は艦首の方を少し突つこんただけでなおも浮いて



おつた——之は新聞記事ですからどの程度まで本當か判りませんが、夫を聞いて私は非常に愉快に思つたのであります。定めて山本さんも御自分の手がけられた大船がアメリカの船と同じテストに會つて尙も參らなかつたと言うことは愉快にお考えになつておいでになるだらうと想像するのであります。其の後私は海軍をやめまして大阪の帝大に行つておまして、10年もあちらで地方評議員と云う様な事をやらされましたが、一向お役に立つ様な事も出来ませんでした。又この表にあります關西に於ける本協會の會合にも色々の世話や奔走しなければならなかつたのであります。4月には丁度休暇中で東京に歸つて居りましたので、ついずるけて仕舞つた様な次第です。誠に申譯ありません。この機會にお詫び申上げておきます。

漢 ありが度うございました。先程のお話中に、近藤さんからお聞き及びのことあたりで、この席でお話になるのをリサーチされました點は速記の修正の際入れていたらいたら何うですか。

八代 断片的でしてね。

山本(幸) 近藤さんは非常に話の多い人ですね。

漢 よろしく御取計らい願います。常松さん、あなた長老だそうですが……(笑)あなたも阪神、東京漢方面、色々御活躍されましたですが一つ思い出話を。

常松 長老という御言葉を頂戴して恐縮至極、穴にでも入りたい様な氣持でございしますが、先程書いたものを頂戴いたしまして拜見して居ります間に一寸感じました點がございします。夫は船舶試験所調査會というものが大正10年に出来まして、夫から試験水槽成績表現法委員會と云うのが大正13年頃にスタートしました。震災の大正12年以前の私達造船所に於きましては長崎以外ではタンクと云うものはサツパリなかつた。それで設計の方で馬力測定を致しますときに寄り所が實はない譯です。そういう時代に唯一つの寄りどころはテーラーのチャートでありまして、あれを頼りに新しい注文船を計畫しておつたのですが、その時分の経験、自分の事を言うのは甚だ恐縮ですが、いかに當時の各造船所の設計を據當しておつたものが苦しんで居つたかと云う一例としてお聞きを願ひ度いと思ひます。

夫は鐵道省の青函連絡船の第一青函丸と云う貨物列車のフーエリであります。その注文が丁度震災の年に各造船所に出ました。その時鐵道省でダイヤモンドシジョンを決められて速力がたしかハーフローデッドコーテイションでトライヤル13節と云うところ

を要求されておつたんです。夫に就きまして非常に幅の廣い、つまり貨車を載せるためにスタビリティーがいらいます。幅が廣くてシャローな船であつて馬力の計算は非常に困つた譯です。夫から之は鐵道省の設計をちよつと變えたらどうかよくなりはないか、そういう氣を起しまして吃水とトリムを變えまして、たしか鐵道省のデザインより吃水2呎を増しトリム2呎をつけました。そうしますと大體2,200馬力と13節で。こういう見當がつかまして2,200馬力マキシマムと云うタービンをスイスから見積りをとつて入札をしました所が、私の勤めておりました横濱ドックに落札致しました。一番安かつたのです。夫から其の時のボイラーの指定はたしか池田式のウォーターチューブと云う事になつておつたと記憶しております。各造船所でウォーターチューブボイラーが出来ないものですから、池田さんの所に何馬力かのボイラーを見積つてくれと見積用の値段の照會が行つたんだそうであります。それで私の方に入札が落ちてから池田さんが參りまして、今度の入札は實に驚いた入札だつた。2,200馬力、夫から2,700馬力、2,600馬力と同じ船についてこれだけの馬力の見積がある。入札した各社の馬力が皆異つて居る。一體これはどれが本當なんだらうかと斯う云う話なんでありまして。どれが本當かわからない。わからないが私の方としては2,200馬力でたしかゆける筈だ。夫でそのボイラーをお願いしたんだから兎に角それをやつてくれと云う事でボイラーもタービンも兩方進めてゆき、船體も進めて行つたんです。所が長い経験のある造船所で2,700馬力、2,600馬力要る。斯う云う事になつて居る。夫にかゝらず横濱ドックで2,200馬力でゆけると云うのは少しおかしい。そういう不安が時間が経つても消えませんが、非常に心配の種となつておりました。とに角タンクのエキスペリメントを一つやつて貰つたら何うかと云う事になつたんですが、其の當時長崎の方にはお願い出来なかつた。遞信省のタンクは出来ていません。築地に有田さんがやつておいでになりました海軍のタンクがあつた。そこで有田さんをお願いしまして、モデルでひつぱつて貰つたんですが其の時は單に裸のモデルを引張つて見る。そのレシデュアルレジスタンスはやつてやるが夫れ以外は出来ないと云う話なんです。よろしくでございます。レシデュアルレジスタンスをやつて下さい。と云うのでやつて貰いました。ところが13節でレシデュアルレジスタンス1700馬力要ると云う計算が出たんです。其の當時私の方の故人になられました田原という海軍



造機大佐の方が常務をしておられた。非常に心配せられまして、常松、それで好いのかと云う御質問なんです。契約面上からいきますと規定の速力が出なかつたならば契約解除と云う事になつておりました。ギャラティーが待つたなしです。少しでもスピードが落ちたら契約金額から何パーセント引くと云う様な生やさしい契約ではないのです。私はレジデュアルレジスタンスで1,700馬力要するというの間違つている。之はそういう勘定になりません。何かの間違ひがあるのです。兎に角私は2,200馬力で行くと信じているんですから、夫でやつて見たらよかろうと云う事で押しました。いよいよ出来上りまして試運転をやつて見ました所、丁度豫定の通り2,200馬力で13.009節というスピードが出来まして、末廣先生なども鐵道省の監督として御出でになつて、ひどい試運転をやつてくれたと云つておられたのですが、これは自慢話の様におとり下さると困りますが、タンクエキスリメートの便益を受け得なかつた當時の造船所における馬力算定と云うものが如何に苦しいものであつたか、その點から云うと今日の造船所の設計者は、非常に恵まれたものであり、しかも良い船が出来ると云う事は本當に有難い世の中であると僕は感ずるのでございます。今日會長の御講演の殊にレジスタンス方面に非常に研究の誇るべきものがあると言われた今日と、震災以前をくらべて見ますと偉い差がある事を感じるわけでございます。

■ ありが度うございました。造船協會の春秋の大會に提出されます論文は、以前は中々少くても時には洋行歸りのお話を伺つて埋合せをすると云う様な事もあつたのですが、其後最近はお断りしなければならぬ位盛になつてまいりました。又論文の内容も、數學とか机上論の方向へ行つて實際とのつなりの少い様な時代もあつた様に思われます。本日井口會長のお話になりました様に理論に基礎を置いて實際に即していると云う方向に來しおる。これは非常な進歩であるというお話でありましたが、どこか足を地につけて居ると云う感じが致します。

井口 只今湊さん、今日私の申しました事に御同感下さいまして誠に有難いのですが、決して以前といえども、實際から遊離して居たと謂う譯ではないのです。私の今日申しましたのは實際問題には色々附随條件がついて來ますが、夫を初めからすべて充す譯には行かないので、根本の假定を一つつかまえてやる。ところが最近の傾向はそういうものを全部取り入れてやつておる。リミテッド、デツプスの問題

にしましても山縣さんの一連の研究にしましても、そういう方面からずつと進めていきまして、そうしてやりますから初めて設計に對しても非常な強力になる。其の結果優秀なものが出来上つたのだと思ひます。そう解釋するんですが、夫が私の解釋が當つているかどうか、今日の講演を繰返す事になりますから夫はこの位にしまして、序に一言私から先程斯波さんからお話のございました事に深く感ずるので一言申し上げます。

實は終戦後、評議員の一人から、たしか渡邊賢介君であつたと思ひますが戦争中の色々各造船所でやつた事、海軍でやつた事、之はこの儘にしておいたら皆散ばつて仕舞うから夫を集める工夫をしたら何うかと云うお話がありまして、造船協會の役員會で其の問題を取上げました。ところが夫は是非やらねばならぬ事だから特殊研究集録委員會と云うものを作りまして、實は事業を始めてるんでございますがそれとも中々經費の問題や人の問題がありまして、且又斯波さんの先程申された様な、そういう大きな構想の所まで未だ行つておりません。然し先程のお話を承りまして益々その必要を感じ、もつと大きな構想でやらなければならぬと思ひますので、之は是非何か形をつけてやつて行き度いと思ひますが、先程玉井さんの言われた様に何かやろうとすると金に困るんです。此の問題を解決しつゝ是非あの間にやられました貴重な體驗を何かの形で残して置きたいと考えます。その一つ二つとしまして長崎でやられました武蔵ですが、あれの進水作業のことが前回と前々回の二回の講演會に出ております。そんな様に出来るだけ先程の斯波さんの趣旨に添う様にやつて頂き度いと思つております。何うか色々な面で御鞭撻御支援を願ひ度いと思ひます。

■ 斯波 造船協會は經營が非常にむずかしいだろうと思ひます。何故かと云うと玉井さんが言われた様に經費の問題ですが、從來ならば船がどんどん出来て造船所も繁榮するだろうし、従つて當協會の費用も捻出し易かつたでしょう。然し今後は御承知の通り日本の造船所は極度に削減せられるでしょう。講和條約が何うなるか解りませんが新聞なんか見ると大分悲觀説が多いですね。すると夫に伴つて當協會も維持發展していくと云う事は非常に困難になるのじやないかと思ひます。この次60年記念も夫まで續けるだけでも容易ならぬと思ひます。發展どころぢやない。細々ながらも60年記念式が出来ればいゝので中々容易ではないでしょう。然し當協會には將來何とかして發展しなければならぬ事は當然吾々に與えら

れる重大な使命であると思うものであります。折角これ迄進歩した日本の造船技術を維持して行くこと云う事は、吾々の重大な使命であり、最も困難な使命であると思う。之に就ては特に若いお方の御努力をお願いするより外はなく、老人としてくれぐれもお願いする次第であります。

井口 一方でまた海軍がなくなつた。だから之から何うするんだ。この事も非常に強く感じましてそれで先頃造船協會に教育制度の委員会を作りまして、之から日本の造船の研究體制或は造船技術體制を何うするかと云う事を取り上げて、外の團體にも呼びかけて、政府に建議案を出したり、當局の方でもそう云う事を考えておられる様ですから、今度どうしても造船家がふん張つていたゞかなければ……

玉井 そうですね。

井口 斯う云う國勢の非常に厄介な時ですからね。夫で海運業者も勿論造船業者と本當にタイアップして今迄の様に——この間も悪口を言つたんですが、海軍と海運業者の間に挟つてあつちこつちうろついている様な造船業者では駄目だ。こう痛感するんですね。

漢 それでは彌原さんにか……

彌原 御指名を受けましたので甚だ僭越であります。少し許り話さして頂きます。造船協會につきましての思い出は、私は本日御出席の渡邊君と一緒に大正3年に大學の造船科を出たので其の時分の會長はたしか寺野先生じゃなかつたかと思ひます。そして日本近世造船史の「明治時代」第一巻でしたか其の少し前に發行されて卒業の時買ったのを憶えております。定價が5圓です。今の岩波文庫の小さな薄いのが20圓もしているのを考えますと、インフレの今日とは言え實に隔世の感が致します。それから之は造船協會には直接関係はありませんが本會五十年の式典に當りまして我が國が外國に商船を譲渡した最後の船に就いて追想するのも我國造船の歴史回顧の一端と存じまして申し上げますと、客船では例の長崎丸、上海丸、之等が大正11、2年頃の建造でデニール造船所へ、夫からディーゼルの貨物船で愛宕丸というのが續いてできました。丁度私が英國に参つて居る時分に郵船が愛宕丸のオプファーを數個の造船所からとつている所でありました。その後商船はみな日本で造る事になつた。先程玉井さんから長崎大會の時は御洋行中であつた、と云うお話がありましたが、造船協會の思い出としては當時末廣博士が會長をなすつて居られ、其の時分からもう大分消化器をこわしておいでになつたらしいんです。しよ

つちゆう胃の薬を持つて旅行しておられました。丁度長崎の大會にお出でになつた2日目から御病氣で倒れられてまして上野屋という旅館の離れ座敷にお慶みになつて仕舞われました。そして私がお弟子だからお世話しろと云う事でお世話する事になりました。

玉井 いや、僕はあの時居なかつた。外國に行つておつた。

井口 元良さん……?

彌原 夫からとうとう長崎醫科大學に入院されたんです。私伺つて、如何ですか、御退屈凌ぎに何かお讀みになりますか、とお聞きしましたら、そうだな、硬いものはいかぬから講談俱樂部でも買つて来て呉れ……そう言われたのを憶えております。夫から斯波さんのお話にございました様に大正3年に私長崎の造船所に参りました時分には、ロイド協會がオールマイティーでございまして、ロイドのサヴェージャーの言うことは鵠の一撃で何物もこれに反對出来ない。ところが年を経ますに従つて、いつか私共のいう事を向うから取上げる様になりました。しまいには、之は玉井さんが非常にお困りかも知れませんが當時日本の總元締であつたミスターコックスと云うロイドのチーフサヴェージャーがいつか神戸から造船所に参りまして、新計畫船のリベットのピッチを直せと云うお話、玉井さんは所長をして居られたが仲々コックス氏の謂う事を聞かれない。ロイドルールと云うものはピンからきりまである色々な造船所に使われる様なルールだ。工作機械も殆んど無い様な、トローラーを作る小さな造船所から長崎三菱の様な何萬噸の軍艦を作る所もある。リベットのピッチが少し位い違つたつて強さや水密は心配ないと玉井さんが言われた(笑聲)コックス氏は、ハアと云つて驚いておつた。それ程日本は自信を持つ様になつた。夫で長崎の設計で構造工作に關して細かい計算を提出すると或はアカデミックだとか、ウォッチメーカーの様だな、と云つて居つた。なんでも細かく研究して議論する、それ程日本の技術を見てくれる様になつた。

然しロイドの忠言助力は日本商船の發達に大きな役割を果して呉れたと思ひます。淺間丸建造の時などは殊にそう感じました。

玉井 ウォッチメーカーは彌原君だよ。(笑)

斯波 御本人だ。

彌原 夫からコックス氏に就いての思い出を一つ……夫は大東亞戦争が段々進んでロイドサヴェージャーを造船所に入れなくなり、仕舞にはロイドが日本か

ら撤退した。その別れの時にコックス氏は、今は戦で自分達は日本を去るが技術には國境がない。何れ平和克復の時は再び日本に来てお互に手を取つて又立派な船を造ろう、と云つて米國に出發したのを思い出します。時間ありませんが、もう一つだけ言わしていただきます。夫は先程玉井さんのお話の、之からは造船に關して充分研究する機關がない、と云うお話ですが、戦後の日本造船界の發達進歩の爲には山縣博士がしよつちゆう云つて居られる様に、造船協會もプロボザーとなつて是非今後は中央に一大綜合研究機關を作る必要がある。之は當協會に課せられた重大事業である、と云う様に感じます。

漢 今日座談會に御出席になりました一人一人の方に御發言を願ひ度いと思つて居りましたが、だんだん時間も経ちますので、すでに御發言のありました方も、未だなさらない方も、何れ原稿をお廻し致しますから、適當にメモをお書きかえいただきます、それを座談會の中に加えさせて頂き度いと存じます。こゝで特にお願い致しておきます。

なおこの席に、折角大先輩の方も御いでになりますから伺つておけばと思ひますのは、外國 — イギリスなりアメリカ或はドイツなり、造船、船舶の専門の人が日本に來られて居ります。大學の先生としてはヒルハウスと云う先生、そのあとパービス先生夫から造船界の方としては、大正時代にニューヨークのロイドソサエティーのニューヨーク、チーフ、サーヴェーヤのフレンチという人、寺野先生と調子の合ひ様な方だつたと記憶しております。夫からブリティッシュ、コーポレーションのドクター、フォスターキング、夫から大正4年にドクター、モンゴメリーが來た。夫からその前後にハンブルグタンクのドクター、ケンプが參りました。夫からブルツクリンのスペリー、コンパスのスペリーと云う先生も見えました。

山本(開) スペリー氏の來たのは丁度 25 年前です。協會創立 25 週年の祝の席に居りました。

漢 先生は二度來たんじやないですか。夫からフォイト、シュナイダー、プロベラのお話がありました。あの關係で若いドクター、クライトナーと云う人が來ました。之等については色々なおもしろい出があらくなると思ひますが、いちいち觸れるわけに行きませんから、補足の際に加えて頂き度いと思ひます。ただヒルハウス先生については大部分の人が實は存じないのですが、私自身は大正8年にグラスゴウのフェアフィールドでお世話になりました。ヒル

ハウスに附ては斯波さん特に御關係が深いと思ひますから斯波さんひとつ其の點をお話願ひたいと存じます。

新波 實は先程のお話のヒルハウス先生が來られて初めて教つたのは大學の2年の時と記憶します。尙横田君等も講義をきかれたと思う。夫からたしか8年位おられて明治34年頃は歸國せられたと思ひます。

山本(開) 5年が6年だ。

新波 初めて吾々がレクチュアを聞いて色々新しい事を知つたんですが、その時の一つの記憶は造船の計算に初めてスライドルールとプランメータを使用した事で恐らく大學で使用したのはあの先生が初めてだつたと思ひます。それで早速先生に依頼し直接イギリスに注文して取寄せて呉れたんです。私今でも持つています。

山本(幸) 私も持つている。その後丸善に注文した。新波 ヒルハウス先生が教鞭をとられたのは短時日ではありましたが其間わが國の造船界に相當大なる功績を残された事と存じます。其の頃先生のエピソードは今日では大分古くなつたので余り記憶に残つて居りません。其の後大正の初め我國で萬國技術者大會開催の節、先生久しぶりで來朝せられたので我々先生の教を受けた連中も久振りで先生の健康なる温容に接し非常に喜びにたえず一夕歓迎の宴を設けた。場所はたしか虎の門の晚翠軒かと存じます。横田博士や故平賀博士等十數人出席して先生も非常に喜ばれた様でした。其の後毎年その日を記念しヒルハウス會と稱し晚餐會を催す事にして居まして戦争前迄繼續して居ました。其の當日は必ず電報をうつて先生の健康を祝する事にして居たが、すると翌日必ず先生より喜の返電があるのが例でした。先生が技術者大會で我國へ渡航の際バンクーバーでシルクハットを購入して來られたが、之は日本到着の役天皇陛下に拜謁の際は是非必要と言うので止むを得ず買ったのだ、と言われた先生は故國にあつても嘗てシルクハットの如き使用した事がないと云う如き無頓着ぶりで慇々歸國の際に、しまふ必要がないと云うので私に記念として置土産に残して出發せられた。今でも尙記念として保存しています。先生は今日まで引續き無妻で居られます。其の理由として先生はひとりの老母に對し珍しき親孝行で若し妻帯すれば自然親を疎外する様になるとの慮慮からだと思ひました。以上の様な先生は極めて無欲活潑なる生活をして居られるのでした。先生も今や相當の年と存じますが今尙健在なりや最近何等消息を得ないの

です。翻つて吾々ヒルハウス會員の者も毎年1人減り2人減り今では極めて小人数になつて居る様な次第であります。

山本(幸) まだ生きてるでしょう。

渡 フォスターキングが來まして、たしか勳章をもらいましたね。御所に行くのに何を着てゆくかと言うから燕尾服と言つたら、朝からイザニングドレス着られるかつてね駄々をこねていました。(笑聲)

八代 そうすると、ウエスト先生は造船協會には関係ないのですか。

井口 顧問か何かしたんだろうと思う。

八代 ウエスト先生は東大でポートレースを始めて教えられたらしいです。

新波 われわれもウエストのレクチュア聴きましたよ。

山本(開) ノート持つて來て寫させておつたよ。夫からカウルさん、所謂國際人としての加茂さんにお伺いするとわかるかも知れませんがグラスゴー會というのがありましたね。

加茂 ええ。

渡 あのオリジンは、グラスゴーに遊學した連中で大部分が造船ですね。

加茂 つまり造船でないのは風間篤次郎とか、夫から富樫さんとか大阪鐵工所の富山喜市氏、近藤滋彌君もそうだ。最近スコッチ、サークルと唱えている。

山本(幸) 今でも案内狀が來る。ヒルハウス先生が來た時は満27才だつたか。

新波 非常に秀才なんだね。

常松 將棋が好きでしたね。チェスが好きで、私が向うに行つた時飯を食いに來いと云うので行きましたが、ろくに話をせずに食後友人と5時頃まで將棋をさしている。余程お好きですね、と聞いて見たら何時もポケットに駒を入れて居るとの事です。

渡 私の先輩で造船協會の創立者の黒部廣生先生から伺つたんですが、ヒルハウスが引揚げられた後誰か後任を推薦してよこせと言う命令を當時滯英中の黒部が受けたら、パービスさんがどこか造船所に關係しておられたのを其の造船所が不況の状況にあつたので連れて來た。パービスを選び出したのは俺だと云う事を黒部さんが酒を飲んで氣焰をはいて居られる際によく言われました。そういう事があつたんですね。

山本(開) そうそう。

渡 まだまだ伺いたいことは澤山ございますが、大分時間も遅くなりますので、あとはメモを書き加えていたいく事に致しまして一應この邊でこの座談會

を終り度いと思います。どうも有難うございました。

井口 ありがとございました。(終)

午後4時分30散會

懷舊座談會に關連して、その後山本開藏、朝永研一郎兩君から次の御申越がありました。

(山本開藏君) 略御免下さい。此の度は造船協會記念講演後に於て座談會を御開催下さいまして、吾々老人連に日頃逢たくても中々思うに任せず甚だ淋しき思いを致して居りました舊友諸君と一堂に會し久潤を舒し併せて久渴を醫するの思あらしめたる絶好の機會をお與え下さつた事は誠に感謝の至に堪えません事で厚く厚く御禮申し上げます。

席上申し上げました通り私は最早老耄致しております座談としては何等申上ぐる様な事もなく虫のよい聴取者として列席して居りましたのですが、皆様の御話の中には一二私から辨明したい、否致さねばならぬ事が出て参りましたので席上で申上度いとも存じましたが何分時間も澤山ない様でもあり、それに未だ御發言なかりし方もありますので、會の進行を妨げては相済まぬと存じ途中容喙は致さず如何にせばよろしからんがと思つておりました處、座長より此の席上でお話致したいことで時間の關係上述べ得なかつた事は後日書物でよいから出して呉れとの渡りに舟の御言葉に便乗して一二左に申し上げます。

(一) 八代君のお話の中に長門の優秀なる性能が認められ、其の計畫に關係したる私は定めて本懐ならんとの御言葉がありました。同艦計畫當時私は計畫主任という名を汚しておりましたが、その計畫の實際は故平賀博士が單獨之に當つて居りまして私は單にロボットに過ぎなかつたのでありまして、私よりは寧ろ同博士の靈が喜んでおられるべき譯であります。他人の功を奪うも心苦しいので此の點辨明致しておきます。序手に申述べさせて頂きませんが、私の計畫主任時代は相當に永くありまして、その間世界に誇るに足るべき種々の艦が出来ましたが、此等は皆私の名義の下に働いて下さいました磯崎、有田、河合、本原、藤本の諸君の構想になつたものでありまして、其の功績は従つて以上諸君に歸すべき次第でありますから此機會に此事實を申述べ其の功績を會の記録に残し永久に燼滅しない様に致し度いと存じます。同時に此の機會を利用し、私が以上諸君に對し平素懷いて居る感謝の念を捧げ度いと思います。此は私が當時の計畫主任としての、

位地からのみでなく海軍々人の一員、更に進んで國民の一人として感謝描く能わざる處であります。

(二) 玉井さんのお話に海軍に於ける秘密保持に對する御批難は或る程度誠に御尤であります。又軍として或程度秘密を保たねばならぬ點あるを御諒知願ひ度い。大體に申しまして吾々海軍の技術者側より所謂兵家側の方が其點八釜しかつた様です。それには無理もない點もありますのです。吾々の方から申しますれば軍縮にて軍艦の保有量が制限せられて以來、量よりは質という事が従前よりは一層大切になつて來ましたので、私は海軍が獨善であつてはならぬ。博く衆智を動員し良きが上にも良き船を作らねばならぬと云う事を考へて居りましたのです。其の一つの現われとしては故末廣博士を海軍囑託にお願い致した事が御座います。夫は當時艦の速力が急激に増大した結果振動が烈しくなり艦砲の照準が困難になつて參りまして、此を何とかせねばならぬ事になり、其頃船の振動に關し研究されておられました同博士に御助力をお願いした次第でありまして、其他にも同博士に於て何か御研究の希望もあらば海軍に於て御助力も致し總てを開放する考でありました。其直後私は軍縮に關し同僚諸君に對し淺右衛門の辛き役目を仰せつかりまして、其役目を果すと同時に退職しましたので其後の事は承知致しません。それから此は貴下まで申上げる事ですが、末廣博士は無報酬囑託にお願い致したのですが、後日誰かより無報酬とはひどいと云う批難を耳にしたように覺えますが、私の考へとしては當時同博士は物質的には寧ろ恵まれて居た様に感じましたので月々百金や二百金は難有いと申す程ではなからうし、夫よりは大學の先生方は位地に對し勳章が低い。吾々軍人は一寸戦争があれば何とか云うて勳章を頂戴するが、先生方にはそれが無いから寧ろ囑託を無報酬として研究の効果實際に現れた場合海軍より其功績を表彰するため相當の授勳を奏請する方が同博士は喜ばるゝに相違ないとの私の考へ方でありまして、同君の研究を輕視した次第ではなかつたのです。處が同君御存生中遂に叙勳の御沙汰を拜せず私は窃かに心を痛めて居たのですが御致後瑞霽ながらも勳一等に叙せられた事を承りました時は私の責任が解除せられた様な氣が致しましたのです。

又大和、武藏の設計が終戦後も絶対機密に付せられ其圖面なども又と世間に出ぬ様に處理せられたる點につきましては私も玉井君と全然同感であります。同艦の設計は私の仄かに承つた處では實に驚くべき構想の下になされ、從來不可能事位に思われて居つた事を仕遂げた様でありまして、吾國の技術者が如何に優秀な

る手腕を有し又其實行者が如何に苦心したかを後世に傳うべき好資料であつたのです。夫を闇から闇に葬つてしまつた事は返す返すも残念でなりません。併し軍ではオールマイティーでありました兵科の主張であつたでしょうから致方ありません。

(三) 將來の事に就ても氣附あらばとの事でありましたので、更に一二附かえます。

(イ) 近來講演者が多くなりました結果、講演時間極めて切詰められ、講演會の席上ではほんの梗概だけしか述べる余裕がない様で、討論などは絶対に封鎖される有様でないでしょうか。古い話ですが私が在英時代ヤロー氏とお話していた場合同氏より協會講演に關しペーパー其自身も有益に違いないが其よりもディスカッションが値打なんだよと申された事があり、私も實に左様だと感じましたのです。吾が造船協會の講演は英國のそれと事情が異なり講演後討論という事は困難の様ですが量は何とかして討論會を實施する様にしたならば、例えば黒玉が磨にかけられ金剛石の實質を顯わす様な結果が得られるのではなからうか。それには春季の講演に對しては次の秋季の講演會の節に討論する様な事にしたならば實行可能ではないかと云う様に考へて居ると云う事です。

(ロ) 役員諸君の御研究になつたものに批難は如何とも存ずる次第であります。會費の事です。今回の會費増額は餘りに消極ではないのでしょうか。正員の會費が月割にして貳拾圓、幼兒に胎を二度も買つてやる丈の額ですが、それで會が思ふ様に仕事をやつて行けると云うならばよろしい譯ですが其點如何と疑われるのです。私の考へは少くとも年額五百圓位にしてよいのではないのでしょうか。斯波君か玉井君の御言葉の中にも今後協會の働くべき、否進んで働きかけねばならぬ問題が多々ある様でありまして、それは先立つものは先ず金でしょうから思い切つて會費値上可能と思ふのであります。私自身五十年前にタツタ金三十圓也を納めた丈で爾來一文も出さず居る次第で自分の懐が痛まぬから勝手な熱を吐く様で、この様な事を口にす資格はないのかも知れませぬ。

以上老人の管々しい事を述べましたが最初の(一)

(二) 以外は此節費重なる紙面を割く値打もないと存じますので便宜御取捨を願ひます。

(朝永研一郎君) 御歴々長老の前で大正4年卒業の後輩が懷舊談でもありませんが、座長の御指名に依り分相應の所を申し上げます。私の學生時代には未だタービンが珍らしく例のコンピネーションシステムを採用した香取丸だとか話題の中心で、加茂先生の御講義にもあつたのを覚えております。これも今は御承知の通り舊

式になつています。安洋丸の減速齒車の折損したのも其の頃で、當時私は未だ當協會には入會して居ませんでしたが、機械學會の講演會でこの事故が報告され其の原因等に就いて活潑な論議が闘わされたものです。ディーゼル機關はまだ極、特殊の存在で熱機關の講議でも近頃こういうサイクルが獨逸のディーゼルという博士に依つて提唱されているそうだという程度の極くあつさりしたもので、その將來は全く未知數でした。卒業した當時軍艦のタービンは全部直結式で、私は横須賀工廠で、山城のタービン製造工事を見學しましたが、見上げるばかりに大きいローターの威容に打たれたものです。その車室の水平接手フランジを仕上げる大型ピットブレンナーが同廠御自慢の設備の一つでした。減速タービン時代となつてはこんなものは無用の長物となり、適當に處分されたと思います。後年同艦の改装でこのタービンも陸揚げされましたが大きすぎてスクラップに割るのに手古ずつているという事を聞き隔世の思がしたことでした。私の卒業する前年、日本も世界戦争の仲間入をし數隻の驅逐艦を急造しましたが何れも無難な往復主機械が採用されました。その一艦の樺は全力公試運轉の最中にどうしたものか強壓注油ポンプが突然止つてしまいました。早速運轉を中止し之を修理してから出直すのが本當ですがそんな悠長な暇がない。そのうちに主クランクがクランク坑内の油面を叩き始める。遂に油は機械室の床一面に溢れ

出し運轉委員から工員に至るまで總員油の中を泳ぐようにしながら、その油を手で擦つて各擦摩部にかげかけして遂に運轉を終了したという今から考えれば嘘の様な話を當時の先輩から聞かれ、運轉というものは何と云う恐ろしいものかと吃驚しました。その先輩は折角新調した靴をその一日で臺なしにして仕舞つたそうです。

その後私も此の型の驅逐艦の新造修理に従事し、運轉にも參加しましたが幸にこんな故障を起さずに済んだのは矢張り一般技術の進歩のお蔭と思います。然し當時の強壓注油法は未だ幼稚なもので、エンジンの油覆が全々無く運轉員は頭から油の飛沫をかぶり漏洩蒸氣に蒸されて人間の天婦羅が出来るというのが常識でした。密閉通風式の艦室には風關が無いので出入のとき帽子や上衣を吹き飛ばされない様に氣を付ける、と先輩から注意された程でした。

爾來 30 年間の進歩は全く驚異ですが、今後の發展には先程の玉井さんの講話のように何うしても學會が中心にならなければならぬと思います。思い起すのは先程申上げた安洋丸事故の討論會で、こういう事は昔の方が却て盛んではなかつたかと思ひます。高遠な學理の發表も勿論必要ですが、今後はこの種の研究討論會をどしどし且時機を失せず開催する事が造船技術の發展に大いに寄與するのでは無いかと思ひます。